

学院史編纂室共同研究報告

「宣教師研究」

二〇二二年度の共同研究のテーマは次のとおりである。

研究テーマ	研 究 員
宣教師研究	○舟木 讓 (院長・経済学部) 池田 裕子 (学院史編纂室) 神田 健次 (顧問・名誉教授) D・H・デルミン (高等部) 村瀬 義史 (総合政策学部) 森田 由利子 (経済学部)
関西学院の戦前・戦中・戦後	○井上 琢智 (元経済学部) 岩野 祐介 (神学部) 辻 学 (広島大学大学院) 橋本 祐樹 (神学部) 本郷 亮 (経済学部) 古川 彰 (元社会学部)

(○印・主任研究員)

本共同研究は二〇一六年度よりW・R・ランバス、J・C・C・ニュートン、C・J・L・ペーツ各宣教師(院長)に関する研究を中心として、継続的に実施されている。二〇二二年度も昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大が収束することがなかったため、多くの制限が継続する中であったが、各研究員によって、以下の研究並びに活動がなされた。

舟木讓主任研究員は、二〇二一年がW・R・ランバス宣教師が逝去されて一〇〇年、二〇二二年が「大学昇格」九〇年という年を迎えたことを意識した授業とメッセージを下記のように行った。

1. 経営戦略研究科「企業倫理」講義「関西学院とキリスト教―関西学院の草創期と日本―」(二〇二二年四月一七日、一〇月一七日)
2. 経営戦略研究科「会計倫理」講義「関西学院とキリスト教―関西学院の草創期と日本―」(二〇二二年五月二四日、七月二二日、二〇二二年一月二九日)
3. 共通教育科目「『関学』学1」講義「関西学院の今と草創期、そして建学の理念」(二〇二二年四月二二日)

4. 共通教育科目「『関学』学1」講義「訓令一二号からカナダ・メソヂスト教会の参画へー関西学院の第一の危機と変革ー」（二〇二二年四月二六日）
 5. 共通教育科目「『関学』学1」講義「関西学院の高等教育機関への発展ー上ヶ原移転と大学昇格ー」（二〇二二年五月一〇日）
 6. 共通教育科目「『関学』学2」講義「関西学院の今と草創期、そして建学の理念」（二〇二二年九月二七日）
 7. 共通教育科目「『関学』学2」講義「訓令一二号からカナダ・メソヂスト教会の参画へー関西学院の第一の危機と変革ー」（二〇二二年一〇月一日）
 8. 共通教育科目「『関学』学2」講義「関西学院の高等教育機関への発展ー上ヶ原移転と大学昇格ー」（二〇二二年一〇月一八日）
 9. 創立一三三周年・ランバス宣教師没後一〇〇年記念学院礼拝メッセージ（二〇二二年九月二六日）
 10. 創立記念礼拝メッセージ（中学部）「I shall be constantly watching.」（二〇二二年九月二七日）
 11. ホームカミングデー礼拝メッセージ「I shall be constantly watching.」ー見守りのもとにある喜びー」（二〇二二年一〇月一四日）
 12. 同窓会神奈川支部第五一回総会講演「見守りのうちで受け継がれる宝ーI shall be constantly watching.」（二〇二二年二月二日）
- 池田裕子研究員は、二〇二二年が、創立者W・R・ランバス没後一〇〇年に当たることから、軽井沢で発病してから横浜で亡くなるまでの最後の足取りを資料で確認し、実際に自分の足で辿った。その経験をもとに、関西学院での葬儀と遺骨が神戸を離れるまでの様子を調べ、「創立者W・R・ランバス終焉の地を訪ねてー軽井沢・横浜・原田の森・神戸ー」としてまとめ、『学院史編纂室便り』第五四号に掲載した。執筆に当たり、T・H・ヘーデンの日記（エモリー大学所蔵）が大変参考になった。調査結果の一部を『母校通信』一四八号（関西学院スピリットの生き証人ー創立者ランバス没後一〇〇年目の邂逅ー）で紹介し、同窓会東京支部三日月会でも報告した（『関西学院の真実…没後一〇〇年を迎える創立者ランバスの実像を探る』、七月一七日、Zoom）。
- また、昨年夏に外国人住宅七号館、八号館、九号館が取り壊されたことを受け、『学院史編纂室便り』第五三号に「七号館のベルシエ先生」一家と九号館のブレイ先生「一家」

を執筆した。第五四号には、『関西学院史紀要』に書いた「W・R・ランバスが日本から送った最初の報告書」に対し寄せられた、池田信元経済学部教授からのコメントを紹介した。『母校通信』一四九号のために書いた「関西学院スピリットの生き証人〜高等商業学部から飛び出した天才作曲家、大澤壽人〜」では、大澤の才能開花にC・J・L・ベーツが果たした役割を紹介した。

このほか、秋学期の「カナダ研究入門B」（代表・水戸考道法学部教授）の授業で、「関西学院とカナダ」をテーマに話をした（一〇月五日、Zoom）。また、金泉会（田中金司・元経済学部教授のゼミ生による同窓会）から依頼を受け、一九六五年卒業生の集まりで、ランバス、ニュートン、ベーツに関する話題を提供した（二〇二二年三月一日、Google Meet）。

校友課からは、二〇二二年用カレンダー制作への協力を求められ、二〇〇九年四月から二〇二一年三月まで広報誌『KG TODAY』に連載した「学院探訪」の中から二二点を提供した。

なお、同窓会から協力を求められ、カナダの関係者と交渉を続けてきた「ベーツ院長の足跡を辿る旅」は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、昨年に続き今年も実施できなかつ

た。

神田健次研究員は、『関西学院史紀要』の本号に論文「関西学院におけるアウターブリッジ宣教師」を掲載した。アウターブリッジ宣教師は長年にわたって学院に大きな貢献を果たしてこられたにも関わらず、「思い出」については語られることはあっても、その著作活動を含めた研究がなされたてこなかった。アウターブリッジ宣教師の戦前の学院における貢献、またその研究成果の評価と意義、さらに戦後の神学部再建への貢献、そして戦後の学院復興への貢献などについて論述した。

また昨年の九月一九日の神戸栄光教会創立一三五周年記念礼拝においては、「W・R・ランバス宣教師の使命を心に刻んで」と題して、学院の創立者でもあるランバス宣教師の中国から神戸に活動を展開して以降の足跡とそのグローバルな働き今日の意義についてメッセージを語る機会があった。ランバス宣教師の学院との関係については、昨年の一二月二日に福岡女学院大学における「ミナト神戸のコミュニケーションとアジア共同体」と題する講演においても言及した。そして昨年の一〇月六日に開催された学院の宗教活動委員会教育研究部の研修会においては、「関西

学院における宣教師の存在と役割」について講演を行った。戦前における北米からの宣教師の役割が、戦後になって徐々に変化した背景に、世界的な宣教師理解の変化があったことを跡づけながら説明した。そして、今日の学院における宣教師の在り方や役割について考察し、質疑などを通して理解を深め合うことができた。

その他、大学博物館における貢献として、昨年九月から一二月にかけて博物館で開催された第四五回キリスト教美術展に際して、その図録に「Image: Christ and Art in Asia」に見る日本のキリスト教美術」と題する論攷を掲載した。これまでほとんど日本で紹介されることのなかった英文雑誌「Image: Christ and Art in Asia」の全一二五巻において、表紙や特集などで扱われてきた日本のキリスト教美術の作家と作品について論述した。この英文雑誌は、欧米でも評価が高く、宣教師の人々にも多くの関心が寄せられた雑誌である。

村瀬義史研究員は、H・W・アウトターブリッジ「関西学院の思ひ出」(原文 H. W. Outerbridge, "KWANSEI GAKUIN MEMORIES", 関西学院大学神学研究会編『神学研究』第九号、一九五九年、四一三〜四一七頁。)の翻

訳を行い、本号『紀要』『資料』に投稿した。

宣教師の子孫との交流に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響で海外への渡航ならびに海外からの入国も大きく制限されているため、今年度も具体的な交わりを行うことができなかった。また、昨年度の本号『紀要』で、サーロー・節子氏(二〇一七年ノーベル平和賞受賞団体ICANの創設時よりの主力メンバーで、受賞記念講演も担当)の来日延期に伴い、関西学院賞ならびに名誉学位記を二〇二一年一〇月七日から一六日に同窓会が準備されている「ベーツ院長の足跡を辿る旅」の中で授与式を実施する方向であると報告したが、感染症収束のめどがつかないことにより中止となったため、二〇二二年度、感染症が収束した段階で改めて関西学院にお招きする方向で調整がなされている。

また、J・W・ランバス宣教師が神戸で最初に居住された居留地四七番館において、W・R・ランバス宣教師が一八八六年一月二四日の神戸到着二日後に読書館(Reading Room)の開館式を正式に行ったことにルーツを持つ準学校法人パルモア学院が、二〇二二年三月末をもって閉校され、法人解散手続きを経て二〇二二年二月二五日

の清算人会にてその歴史に幕を下ろすこととなった。パルモア学院のこれまでの働きに感謝する意味も込めて、記念礼拝を啓明学院と関西学院が共催し以下のような形で実施した。なお、本学院からは、村上一平理事長、藤田忠弘常務理事、田中敦学院史編纂室室長、本山雅子学院史編纂室職員ならびに舟木讓院長が参列した。

なお、パルモア学院で保管され、関西学院に寄贈されたW・R・ランバス宣教師の遺髪を啓明学院と共に保管するため、二つの保存箱に分け、礼拝の中でその一つを、関西学院より啓明学院に贈呈する、寄贈式も行われた。

*パルモア学院創立一三五周年・法人解散記念礼拝

日時：二〇二一年一月二十六日(日) 一四時

場所：啓明学院 J・W・&M・I・ランバス記念礼拝堂

司式：舟木 讓 関西学院院長

奏楽：太宰まり 関西学院オルガニスト

メッセージ：辻 学 啓明学院院長代理

式辞：新 尚一 啓明学院理事長

礼拝後の挨拶：村上一平 関西学院理事長 小西和雄

パルモア学院理事長(法人解散前)

(舟木 讓)

当日使用した礼拝式次第 (除、賛美歌楽譜頁)

式 次 第			
司 式	関西学院 院長	舟 木 讓	
奏 楽	関西学院 オルガニスト	太 宰 ま り	
前 奏	奏		
祈 きの 詞			
賛 美 歌	「十字架の血に」(『讃美歌21』436番) <W.R.ランバス宣教師 愛憎賛美歌>	一	同
聖 書 朗 読	マタイによる福音書 7章7～14節	司 式 者	
祈 り			
賛 助	啓明学院 院長代理	辻 学	
祈 り			
賛 美 歌	「昔 主イエスの」(『讃美歌21』412番)	一	同
W.R.ランバス宣教師ご遺髪贈呈			
式 辞	啓明学院 理事長	新 尚 一	
賛 美 歌	「心に愛を」(『讃美歌21』88番)	一	同
祝 福		司 式 者	
後 奏			
挨拶	関西学院 理事長 村上 一 平 元パルモア学院 理事長・同窓会長 小 西 和 雄		

パルモア学院創立135周年・法人解散
記念礼拝

主 催：学校法人啓明学院・学校法人関西学院
日 時：2021年12月26日(日)午後2時
場 所：啓明学院J,W,&M,Iランバスチャペル

「関西学院の戦前・戦中・戦後」

井上琢智主任研究員は、神崎驥一第五代院長の伝記執筆のための基礎資料公表の一環として遺族より寄贈された神崎驥一筆の「日記」のうち、前号につづき一九二〇年一月から三月までを同窓である倉橋桃代さんのご協力を得て翻刻し、可能なかぎり、登場人物を中心に多くの注をつけ、神崎のアメリカでの活動範囲を示す地図を付して、本誌第二八号に「神崎驥一日記 二」として投稿・掲載した。

また、二〇一九年二月一四日、NPO法人向日庵の公開研究会で報告した「〔研究ノート〕 関西学院〔高等学部文科〕の英語教育・研究―寿岳文章をめぐる人びと―」を基礎に「関西学院〔高等学部文科英文学科・文学部英文学科〕の英語教育と研究―竹友藻風、志賀勝、曾根保、岩橋武夫、寿岳文章を育てた人びと―（上）」を本誌第二八号に投稿・掲載した。なお、本稿は今後さらに二回にわたり（中）（下）として掲載されることになっている。

また、寿岳文章研究に関しては、向日市と同市（向日市文化資料館）から業務委託を受けたNPO法人向日庵とが協力して実行委員会を設置し、「寿岳文章 人と仕事

展」が昨年一月二三日から三月二日まで向日市文化資料館で開催され（生誕一二〇年記念 寿岳しづ展）も同時開催）、二〇六六名の来館者を迎えることができただけでなく、京都新聞、毎日新聞、日本経済新聞等で報道された。井上はその『図録』に「友情・勉学と愛―寿岳文章・岩橋武夫と妹静子―」を掲載した。また、寿岳文章の和紙調査・研究に焦点をあてた国際シンポジウム「二〇世紀の和紙―寿岳文章 人と仕事―」がコロナ感染症のためZoomを用いて一〇月一六日に向日市文化資料館で開催され、日本から二名、海外から三名が報告した。この開催にあたり、日英語の講演録を作成・事前配布し、また*Hand Papermaking Newsletter*、*International Association of Hand Papermakers and Paper Artists* (IAPMA) などを通じて海外広報につとめた結果、三六〇名の参加を得て実施できた。井上はその裏方を務めた。

なお、現在関西学院大学博物館では、寿岳文章など関西学院の卒業生の「人と仕事」を紹介する特別展示会を本博物館で開催できるかどうかを検討いただいている。

（井上琢智）